

横浜歌人会 会報 114号



- | | |
|-----------------------|------------|
| 01 新代表委員、副代表委員、運営委員挨拶 | 吉野裕之、真鍋正男他 |
| 03 角宮悦子さん追悼 | 高橋みずほ |
| 03 研究会報告―篠笛を聞く | 川井怜子、小島熱子他 |
| 05 新年歌会／詠草 | 藤田絹子、竹内芳恵 |
| 08 わたしの自選十首―歌集紹介 | 藤田絹子、渡部洋児他 |
| 10 編集後記 | |

新代表委員挨拶

自然体ということ

吉野裕之

横浜歌人会は、戦後組織された「横浜歌話会」「黄木会」のあとを承け、一九六九年（昭和四十四年）に設立されました。当初数十名だった会員も現在では約一二〇名。この間、杉本三木雄さん、畑和子さん、熊沢正一さん、草柳繁一さん、塩野崎宏さん、千々和久幸さん、平野久美子さんといったリーダーのもと、活発な活動を展開してきました。

今般、代表委員に選任され、自然体ということも思っています。多くの個性が集まる横浜歌人会。しかし、個性は必ずしも尖ることではありません。時にぶつかることがあっても、それぞれが輝いている、つまりバランスが大切なのだと思います。自然体とは、気負いのない、自然な態度のこと。会として自然体であることが、いろいろな個性をバランスし、力となる。それは、しなやかでしたたかな力。新春歌会、文学散歩・即詠歌会、研究会、観月会。あるいは、会報やホームページ。いずれも充実しています。しかし、もともと魅力なもの／こととしていきたいと思えます。

短歌は、人の痛みや悲しみを掬う／救う器。どんなに厳しい表情をしていても、人に寄り添う意思をもった作品を制作していくこと。それが、私たち短歌に関わる者の役割。そのためには、大いに学び、

大いに遊び、自らを耕す。そう、横浜歌人会は、そんな素敵な、学びの場&遊びの場。一緒に楽しんでいきましょう。

新副代表委員挨拶

就任のご挨拶

真鍋正男

総会後の運営委員会で、副代表の選任を受けた。もとより非力は承知の上、代表や運営委員、事務局の皆様をサポートして、歌人会の活動が楽しく展開されるよう努めたい。私にとって、歌人会の魅力は、懇談の魅力。何気なく隣り合わせた方から、思いもよらないお話を伺うことが、これまで何度もあった。横浜に居住して四十年ほどになるが、町の歴史など無知のままに過ごしてきた。横浜生まれ、横浜育ちの方から昔の町の姿を教えていただける、そんな機会は、この会の他にない。富士山の絶景ポイントも幾つもあるし、七石山横穴古墳群などの古代遺跡も豊富にある。秦氏配下の技術集団が居住した関係で中世の史跡も多い。横浜は鎌倉以上に歴史の宝庫であることを最近になって知った。普段、電動自転車で行き回っている環状四号線は、本郷台の海軍燃料廠と追浜にあった海軍飛行場（現在は日産自動車追浜工場）を結ぶ軍用道路であり、鉄道が敷かれていたらしい。自転車で通り抜けるには恐怖を感じる相武隧道のトンネルも、昭和十八年完成の戦争遺跡。

いたち川の川床には米軍接收前に弾丸銃器が埋められたと聞く。いつか、歌人会の皆様とご一緒に近辺をウォーキングして、横浜の歴史を味わい、体感できればと思う。

新運営委員挨拶

地元横浜を感じ取ろう

工藤こずゑ

初めて中華街で食事をしたのは、大学を卒業した年の六月、研究会のOB会が開く岡野弘彦先生の誕生会に出席した時です。先輩達と共に中華街から山下公園、フランス山、外人墓地と、岡野弘彦の作品の背景を聞いたり、逍空の散策コースを辿ったりして一日を過ごしました。その時はこの町に住み暮らすようになるとは思ってもいませんでした。

私は結婚して横浜市民になったのですが、私の家族は横浜が生まれ故郷です。夫も娘も街角で偶然に幼友達に遇ったりするのです。私も、子を産み育てながら、生活圏としての横浜を詠んできて、段々と地元意識が育ってきているように感じています。さらに横浜歌人会に入会し、いろいろな刺激を頂くことで、「地元横浜」が益々身近になってきました。

この度、入会数年の若輩の身で運営委員を仰せつかり、内心おたおたしております。

子どもの時から、準備や計画が大の苦手で、成り行き任せの生活を送ってきているので、「運営」はと

ても無理ですが、楽しく参加することは出来るだろうと思っています。どうぞよろしくお願い致します。横浜の斬新さと包容力を感じながら、「歌が好き」を基底に活動していきたいと思えます。

横浜に住んで

三枝むつみ

伝統ある横浜歌人会の一員となって五年目、今年から運営委員をさせて頂くことになりました。さらに皆様の親睦が深まりますよう微力ですが勤めてまいります。どうぞ、宜しくお願い致します。担当は観月会です。今年の十月の満月は十六日。ちょうど日曜日と重なります。多くの方に出席して頂けるよう、この十月十六日が観月会と決まっております。絶好のお月見です。予定に今から組み入れて下さいますようお願い致します。

横浜に住んで三十五年が経ちました。私は長野生まれの長野育ちですが、子供たちは羨ましいことに浜っ子、横浜がふるさとです。私には横浜の古い思い出があります。小学四年の夏休み、横浜に住む叔父さんの家に遊びに行ったのが初めての横浜です。桜木町で降り、本郷町の高台にある家まで車に乗りましたが、車の外の景色が斜めで、上り坂の体感が微かに残っています。同い年の従妹が運んできてくれた飲み物が、これまた生まれて初めて飲んだココアでした。菓っぱく、幼い舌には美味ではありませんでした。川縁の鰻屋さんで鰻を御馳走になったのですが、食べ終えて出ると、柳が風に吹かれて

いたのも覚えてます。食べ物の思い出が多い横浜ですが、どこか御縁があつたのでしょうか。あの日の叔父さんの家と同様に、坂の天辺に暮しているのも不思議なことです。

妻、そして子供の横浜

嵯峨直樹

武蔵野市から妻の実家のある横浜に引越してきて八年になろうとしている。

ここで小中と過ごした子供にとっては地元であり、非常に帰属意識が高い。横浜市歌も当然のように歌えるし、横浜の地理に関しては私より詳しい。彼は自転車と電車を駆使して、横浜という都市の情報を非常に敏感に吸収してきた。

私などと比べて帰属の本気度がまるで違うのだ。小中学生という時期は人間の郷里を決定づける時期なのだろう。そして、理屈なしに、血が、肉が「郷里は横浜」と言わせるものなのだろう。そして私にとつての横浜とはどこまでも、妻の、そして子供の横浜に他ならない。

新運営委員になった方がいいが、迷惑をかけないか不安である。

正確さに欠ける、注意が散漫、不器用、いつまでも仕事を覚ええない……。社会人をされている方、経験された方ならこういう人に苛立った経験は一度や二度ではないだろう。そして実に、そういった人々は私と同じタイプの人間である。幸いにして今は気ままな自営の為、万事自分のペースで仕事を進める事

り払い、庭に面した硝子戸から秋の陽がいつぱいに射し込む自然光の中の演奏会であった。

鯉沼廣行氏の二曲目は「篠の音取り」音取り（ねとり）とは聞きなれない言葉だがオーケストラが演奏前にオーボエの「フ」の音でチューニングをするように「音取り」とは音を合わせるという意と後で聞かされた。身近に笛を聴くという緊張と相まって、演奏はまことに力強く響き、細く小さく聴かせるときも、それはぴんと張った美しい糸のように緩むことがない。高い音からひらりと低い音に変わる間が何ともいえず聞きほれた。

前帯に四本の笛を差し瘦躯古武士のような鯉沼氏は丁寧な種類、竜笛、尺八、親しみのある篠笛などを説明され、種々曲想の解説もあり、最も好きな地である九州の国東でのご自分の活動なども話された。

平凡な申しようだが篠笛の音にはしみじみとした感動、「あわれ」が感じられるように思った。女性奏者坂本真理さんとの合奏も素晴らしく篠笛の魅力を堪能した。帰る際にはお二人の演奏者にお見送り頂くといい思いもかけない様に、また、感激も入りであった。

篠笛を聴く会

小島熱子

第二十一回横浜歌人会研究会「篠笛を聴く会」は

十月二十八日（水）三溪園鶴翔閣で午後二時より催された。参加者は会員以外の人も含めて三十八名。三溪園に散策に来ていた男性一人も飛び入りで参加。当日は汗ばむくらしいの暖かく晴れた日であった。鶴翔閣は明治三十五年に原三溪が住まいとして建てた約二九〇坪の建物で、横浜市指定有形文化財となっている。三溪が日本美術院の画家達を庇護したことは有名だが、鶴翔閣の建物そのものも歴史を感じさせる風格のあるもので、篠笛を聴くには真に相応しい場所であった。

演奏者の鯉沼廣行氏は横浜生まれで国立音楽大学卒。日本各地のみならず、ベルギー、アメリカなどでの演奏活動を行っている横笛の第一人者。演奏された曲は十曲。その中には編曲された「さくらに寄す」「青葉の笛」「荒城の月」もあり、冴えた笛の音に日頃聴き慣れている曲が新しいのちを吹き込まれてまるで別の曲のようにクリアに立ち上ってきた。共演の坂本真理氏の笛も耳に残った。また演奏の合間の鯉沼氏の笛についてのレクチャーも大変分り易く、笛への親愛の度を増すものとなった。

篠笛が劇場やコンサートホールよりも、お寺や神社や自然の中で演奏するとき、より深く心に沁み込んでくるという話は鶴翔閣で聴いて実感したことであった。西洋のオーケストラと違い、音が動いていく、移動していく。笛を吹きながら演奏者が遠く歩いてゆき、自然の中に去っていくような構成は、日本の

楽器篠笛の特質でもある余韻、間をより効果的にしているように思えた。晴れ上った秋の午後、広い三溪園の一角の格式ある鶴翔閣において、会場を充分活かした構成で一流の篠笛を聴く時間をもてたことはあわせであった。



篠笛を聴いて

三枝むつみ

「篠笛を聴く会」の案内を頂き私は直ぐに参加を決めた。会場が秋の三溪園であること、そして、奏者の鯉沼廣行氏の紹介に作曲を高田三郎に学んだとあったからである。私は、吉野弘や高野喜久雄の詩に作曲した高田三郎の合唱曲に親しんで来た。音と言葉が相俟って心に滲み徹る曲は精神性が高いもの

だ。

十月二十八日。三溪園鶴翔閣は、名の通り鶴が羽根を広げたかの爽快な造り。畳敷きの大広間に硝子窓から外光が入り清澄であった。

奏者は廊下を笛を吹きつつ私達の背後から登場。廊下側に座っていた私には、袴の衣擦れと吹き込む息とが聞こえ、ライブ演奏の生々しさに最初から引きこまれた。横顔を見せる奏者が、舞台の中央まで来て正面を向いた瞬間は能の形式美を感じた。

演奏の合間の笛にまつわる話も興味深かった。鯉沼氏は腰に二本の笛を差していらしたが、その中の黒く短い能管には驚かされる。能管の素材は百五十年から二百年経った民家の煤竹が良く、さらに三百年吹くと本当の音が出るとのことだ。その能管による「乱曲」は、空間を切り裂くように鋭く、呼び出した霊が激しく舞って消え散じるようなイメージが湧き魅力的であった。

日本で最も好きな地は国東半島と言われ、その地で即興的に吹いた時、大自然と融合した感動を話された。その経験がコンサートホールではない神社仏閣など自然が感じられる場所での演奏に繋がっているとのことだ。

最後の曲は「まほろば」。鶴翔閣の耳を澄まさねば聴こえない遠さから、二本の笛は次第に近づいて来た。杳さと懐かしさに胸が一杯になる素晴らしい曲と演奏であり、演出が見事だった。心が洗われる

良い会であった。

篠笛を聴く会



中村泰子

秋晴れの十月二八日、

横浜三溪園で「篠笛を聴く会」が催されました。園内では菊花展が開催されていて愛好家丹精の大幅の菊を楽しみながら会場に向かいました。

会場の鶴翔閣は横浜市有

形文化財に指定されている二九〇坪に及ぶ重要な和風建築です。調度品などなく椅子だけが並べられ玻璃戸の外の前庭は緑濃く凛としたなか演奏会は始まりました。

演奏者の鯉沼廣行氏は横浜市出身で映画「乱」、NHK大河ドラマなどの横笛指導と演奏を担当し内外で活躍されている方です。

篠笛はあたかも一本の絹糸がしなやかにのび切れ目なく流れるような深い音色です。一名の女性演奏者を交えて前方より後方より細く長く低く呼応するような奏法は圧巻でした。名曲「青葉の笛」では須磨の合戦を彷彿とさせるように嫺々とした笛の音が印象深かったです。さくら、まほろば、荒城の月、千灯路などの曲演奏の合間に篠笛についてのいろいろ

ろな説明がありとてもわかりやすく興味を持つことができました。

演奏会が終り会場を出ると鯉沼氏と女性演奏者が外口に立ち私達を見送ってくれ日本の伝統芸能の奥深さを感じました。

参加者三七名。一般来園者のかたが是非聴かせてほしいとの飛び入り参加があったことも嬉しいことでした。

帰途につく道すがら私の身の内に笛の音が響いているようで篠笛に魅了された秋の一日でした。

新年歌会報告／詠草

平成28年1月30日 馬車道十番館にて開催

詠草参加 49名

新年歌会に参加して

藤田絹子

平成二十八年一月三十日(土)、恒例の新春歌会は、総会の後、今年も馬車道十番館で行われた。雨は上がったものの大曇りの寒い日であった。

午後二時五分より歌会開始。司会は稲垣紘一さん。出詠数は当日一首追加され四十九首、欠席者が四名いて四十五首を批評することとなった。因みに前年は出詠数五十首、当日欠席者が六名いて四十四首で

あった。

歌会は、五つのテーブルの座席順に各人が一首ずつ評し、一順した後まとめて第二評者が歌評をするという形で今回も進められた。

詠草は事前に配布され、目を通しての言え、超結社、参加者五十人近い会で誰もが評者になるという緊張感がある。

第二評者は河北笑子さん、真鍋正男さん、高尾文子さん、小島熱子さん、後藤恵市さんの五人の方が担当した。率直・簡潔な評に歌評の要諦を学んだ。

歌評の中で難解な歌として「こころとふこころの奥の編み籠の透きまに忘れしひとつぶの麦（角宮悦子）が取り上げられ、さまざまな意見が交わされた。作品の読みは、作者を離れ、読者に委ねられることを改めて気づかされた。

特に印象に残った歌は「しどろなるけふのわたしに帽子なぞすずしくのせて影は従きくる」（川井怜子）だった。こういう歌を私も涼しく詠んでみたいと思っただことだ。

歌会は司会の稲垣紘一さんの手際よい進行で、質疑応答の時間もとれ、四時四十分終了。緊張感の中にも和やかな新春歌会であった。

新春歌会報告

竹内芳恵

小雨まじりの肌寒い一日であったが、予定通り馬



車道十番館で、新春歌会が開催された。

横浜開港の頃、海岸沿いに建てられた外国の商館は「一番館、二番館・・・」と呼ばれていた。古き時代の面影を残す建物でレトロな雰囲気を持つ館内は暖炉やピアノを備えた室もあり、歌会を盛り上げるのに最適の場であると思った。出詠歌は四十九首の歌会であった。

稲垣紘一氏の司会のもと例年通り全員が席順に従って一首ずつ感想を述べた。良いと思う点や、疑問に思う箇所など手短かにスピーディに進行した。終わりに第二評者として十首づつまとめて河北笑子、真

鍋正男、高尾文子、小島熱子、後藤恵市の各氏が評した。この歌会のもつて行き方は、自分達の結社でやっている点数を入れるやり方より時間を有効に使用して実りの多い方法ではないかと思う。

「コロスナヨ」男の言へば「マジカヨ」と女あひな
く応へけるかも

など異色の歌もあつて皆の緊張が一度に解けた場面もあった。

見の限り藍く澄みたる海原に息深く吸うふるさとの海

など望郷の歌や

おべんたうを食べたいなあと冬日差す枯野にをりぬ亡き母とふたり

のような、しんみりと诗情豊かな歌

水神の杜の流れに手を合わせ朝陽にひかる水を掬いぬ

など元旦の若水を詠った厳肅な気分の歌

ビッグバンの前にも後にも時間という太く果なき流れ貫く

などのスケールの大きい歌もあつたが、時間というものを表現する場合の問題点など提起されて、興味深く思った。

全体的に説明的な歌は見当たらず、臨場感、詩情にあふれた歌が多く、新春にふさわしい爽やかな歌会であった。



平成二十八年年度 新春歌会詠草

・公園の落葉を掃くな秋風の心をもつと見てみたか
れば
平尾眞

・育つやと危ぶまれしを永らへて喜寿の翁はこの春
にあり
杉下幹雄

・川の面によこたうさまに方形のビル映りいる夕景
のなか
塚田キヌエ

・伊藤公、夜の海路を訪ひにけむ野島の別荘にとう
ろう七基
土屋美代子

・上下してゆるく飛びたつ五羽の朱鷺恵みの飛翔を
車窓に見惚る(佐渡)
堀部知子

・水飴のようスコールのよう冬の月美しいとき私た
ち
吉野裕之

・見の限り藍く澄みたる海原に息深く吸うふるさと
の海
津波古勝子

・来む年には楽しきことの数多あれと祈りつつ正月
飾り購ふ
中村規子

・枯れながら絡まる鳶の幽かなるささめき冬の夜を
尽くして
嗟峨直樹

・水神の杜の流れに手を合わせ朝陽にひかる水を掬
いぬ
平野久美子

・国会前 安本法(戦争法) 反対デモの輪に凜とし
て寂聴 齢九十三
田之口久司

・呼応せる篠笛二管いづこより我を包みていざなふ
まほろば
中村泰子

・おべんたうを食べたいなあと冬日差す枯野にをり
ぬ亡き母とふたり
小島熱子

・ケアプラザのなだりに咲き初む冬桜淡き色見す思
慕のごとくに
新田由美子

・グローバルな世界となりぬ新玉の年のはじめの
幸い祈る
野崎美智子

・湯に入りて今宵死してもいいような後二十年生き
たきような
渡部洋児

・ビッグバンの前にも後にも時間という太く果なき
流れ貫く
井澤幸恵

・八坂の塔見つつ小春の坂を行く神田正輝に会ふか
もしれず
藤田絹子

・暗闇の鳴き声の方みあぐれば遊星やどる鋭きうち
ばしに
宮下俊博

・酔芙蓉かすか微笑み浮かべたりカメラ近づけ撮る
ひとあれば
竹内芳恵

・きみのあの「もしもし」に宿りし体温も電話ボツ
クスとともに運び去られつ
池谷しげみ

・うすらかに開く紅梅遠望み光の方へ行く人のあり
つ
葉山昌子

・うたはむと窓をあければ風入りて庭の辛夷の畳に
散れり
伊藤宏見

・「コロスナヨ」男の言へば「マジカヨ」と女あひな
く応へけるかも
後藤恵市

・樹木医のオペをうけたる大櫓静かに時雨をあびて
みるなり
稲垣絃一

・少年の独楽打ちつける音響き競う眼のきらきらと
して
伊藤美枝

・子を抱き孫をあやししわが胸に今宵はそつと曾孫
つつむ
朝井恭子

・しどろなるけふのわたしに帽子なぞすすしくのせて影は従きくる
川井怜子

・みどりこのわれの重さを記憶する母の諸手よかく焼かれけり
高尾文子

・生きているものらの音を引き受けて 撞木を放つ寺の鐘
高橋みずほ

・大釜に二升五合炊きたての飯美味きかな馴染みの老舗
松本嘉猷

・忙しなきスケジュール縫い歳末のひと日を地方競馬場にいる
千々和久幸

・元朝の明治神宮参道に街頭写真を撮られし記憶
長谷川静枝

・出し抜けに鸚哥飛び立つ心配して埋めしところの侘助落ちぬ
小南紀子

・くれなゐのきはまればかすかに黒み帯びどうだんつつじの散り際の燦
河北笑子

・最上階冬の苺の葉のなかの赤きをつつくようこそ目白
野一色容子

・そこそこに寒き元旦還暦になる妹と鳥居をくぐる
工藤こすゑ

・赤き実の秋に熟すを満身にぶら下げて柿の一樹静けし
桜井健司

・こころとふこころの奥の編み籠の透きまに忘れしひとつぶの麦
角宮悦子

・店先にパンジー並ぶほどほどの仲良し小好しの小の字のように
原昌子

・浅間嶺を遠くに見つつ歩みゆく藁束のある畑中の道
山本登志枝

・春の日に少年ら来て廃工場跡に石など投げて遊びぬ
尾崎知子

・押葉せしかへるでもみぢ緋を濃くす六法全書の文字闇吸ひしか
三枝むつみ

・手放してまた手繰りよす人の縁今度またねの今度はこない
渋谷香代子

・成長すれば群を離れて彷徨ひてつひに還らず雄のニホンザル
真鍋正男

・寧楽の春けぶれる木々のあはひには領巾振る乙女のみほろし遊ぶ
荻谷君代

・この先を歩みつづけて何処へと 紅萩の道ふと立ち止まる
田代弥生

・葉の落ちしズズカケにあまたすす下がる風吹かば鳴り出でむばかりに
時本和子

・登りゆく観覧車より景望む 掴む手すりの濡れるようなり
福原捷子

わたしの自選十首

藤田絹子歌集『父のコーヒー沸かし』

『父のコーヒー沸かし』は第一歌集『ひつじ草』以降の平成二十年後半より平成二十七年五月までの作品を収めた第二歌集である。二人の母を見送ってからの日常雑詠が主な作品である。

作品の多くは、所属結社誌「群帆」に発表したもので、ほぼ編年体にとめあげた。

前歌集よりどれほどの歌の力がついたのか覚束ない。歌集名は次の一首から採った。

ぼこぼこ昔のままの音がする父の使ひしコーヒー沸かし

明治生まれの江戸っ子の父は、酒飲みで新し物好きだった。

幾度も父読みくれし狸塚懐かしみ思ふ雪降る夕べ
『ひつじ草』

父の年齢を疾うに過ぎてしみじみと父を思う。

思えば学生時代より抱いて来た短歌への興味関心を直接結社で学ぶことができるようになったのは五十三歳で職を辞してからであった。

今、私にとって「短歌」は生活の一部にも思える。

齢を重ねて歌を詠めることを幸せに思っている。こ

れからは日常詠をいかに深めてゆくかが課題となるであろう。

「自選十首」

萌え出づる櫛若葉の風に聞け貿易商エリスマンのこ
とは

中空に黒揚羽二つ舞ひ上がり森閑とせり母逝きし朝
風荒き潮岬の海の色肺腑を染めて黒潮うねる

列並めて川上りゆく鴨の群れ青頸びんと尾羽を広
ぐ

何も言はぬ小三背せなに受け止めて東電事故のニュー
ス見てゐる

イセブラのノスタルジーをあたたためて昼定食の牛鍋
を食ぶ

静かなる時を湛ふる幹の瘤雨に艶めく万朶を支ふ

ぼこぼこ昔のままの音がする父の使ひしコーヒ
ー沸かし

鳴き騒ぎなべ鶴ばらばら降りて来る生の緒激し空暗
むまで

電子辞書のふくろふの声さびしけれころすけほうほ
う幼子うたふ

(二〇一五年一〇月二十七日、現代短歌社発行)

渡部洋児歌集

『ハガル』サラ・コンプレックス』

「自選十首」

目を病みて久しき緑の眼底に黄泉まで映るこ
と稀に有り

間違えて倭おのこに生まれしと中世拷問博物
館にて

きさらぎのパールさびしき言葉のみ選りて
聴きたる汝が耳の為

変相凶なる絵を識りてその日から誰よりもあと
に死ぬと決めたり

弱冷房車の弱の字弱く書かれて渡部弱児と
なりゆくその後

夢見たるわれか仕事のわれかまた執深きわれ
か聴く遠花火

悔恨の先取りなるか朝家を出でて彼方をつね
望む癖

哀しくとも旨きものは旨き四万十の鮎塩焼きの
粒子なす塩

金の夢銀の夢わが喰らいたるいさらいの如き
鹿苑寺はすぐ

サラ一人ハガルは何人朝に日にゆれつつきよ
うの錦市場へ

本集は個人の歌集としては『屈形のウエヌス』

『ガラのままぼろし』に続く第三歌集になります。平成六年に『ガラのままぼろし』を出してから約二十年経つての第三歌集となりますが、その間の作品の約半数の歌をもつてまとめました。歌はずっと作り続けていたのですが、なかなか歌集にまとめるということに意識が向かず、こうして一冊にしてみますといささか間があき過ぎた感はありません。しかも時の流れと共に、少なからず詠おうとする内容も手法も変わって来ている気がしています。

歌はテーマを決め、そのテーマにそって作ることが多く、そういう意味でも歌集としてまとめて初めて歌が完結する気がします。これは私の作り方によるのでしようが、月々の発表の段階ではまだテーマにそった一連が完結していき、いわばジグソーパズルの各ピースをアトランダムに作っているという感じでした。そのジグソーパズルの完結した姿が歌集というわけです。

また詠う対象や言葉の鮮度ということも常に考えています。ここでいう鮮度とは時代に即しているという意味ではないのですが、鮮度のとらえ方は人によって違うかもしれず、私にとつてのと言うしかありません。言葉について言えば、自分が鮮度が高いと感じた言葉は古今あるいは洋の東西を問わず使っています。

自分の歌集の説明というのは難しく、恥ずかしい

ものです。それは歌人である以上、すべては歌で伝えたいという思いがあるからなのかもしれません。

(二〇一五年九月二十八日、短歌研究社発行)

小島熱子歌集『ぼんの不思議の』

この歌集は『春の卵』『クレパスの線』『りんご1／2個』につづく第四歌集である。二〇一一年春から二〇一五年初夏までの約四年間の作品を四季の循環に添って自選構成した。

私は年年、季節や四季の移ろいに対しておもしろい入りが深くなってきた。結局は日々の事象も季節に受容され、季節の中に溶解してゆく。そう思うと何かしーんとした気持ちになってしまうのだが、そういうところからしか私には短歌が詠めないような感じがしている。

なお、この集には「相撲甚句」という三十首一連がある。これは私が篤志面接委員をしている特殊な世界を詠んだものだが、帯文で小池光氏が「読者はまず「相撲甚句」の一連から読まれたらどうか。」と書いて下さったことに感謝している。

判じ物のような歌集名は「ぼんあられのぼんの不思議の小父さんを今も待ちをり花曇りの午」に拠る。

「自選十首」

・ああまるで手紙のやうな朝のかぜ木綿めんのストール
ふるはせて過ぐ

・透明な傘がわたしをむき出しのままに庇護して
三月の雨

・生牡蠣がつるり喉を下りけりひよつとして大変な
モノを呑みしか

・ぼんあられのぼんの不思議の小父さんを今も待ち
をり花曇りの午

・加賀紋かがのの繡ぬいの萌黄もへいにいゆけるはたけなほ 酩まのときなりき
在り経つ

・あんずの木に子供自転車たてかけてゆくへふめ
いのをさなごあそび

・うつくしく秋刀魚一匹食べをへた夫の皿にゆふ
かげとどく

・時間の象かたちけふはなんだか楢田にて庭の水引草みづひき
をりをり傾ぐ

・山葡萄の黒実日に輝るほそき道 みんなはどこ
へ行つたのだらう

・出所する男が礼にと唄ひくれし相撲甚句のこゑ
のひびきよ

(二〇一五年九月一六日、砂子屋書房発行)

編集後記

・新代表委員、新副代表委員及び本年年度の総会
(1月30日開催)において新たに運営委員に選任
された方からご挨拶を頂きました。

・昨年の研究会は平成27年10月28日に三溪園 鶴翔
閣にて開催されました。参加者は38名で、篠笛を
聴きました。

・本年の新年歌会は平成28年1月30日に馬車道十
番館にて開催されました。詠草参加は49名でした。

・会員の皆様で、歌集を上梓された方は、自選10首
と説明文(23字×28行)を左記後藤あてにお送
りください。会報に掲載させて頂きます。

・横浜歌人会では現在、年に一度、会員名簿を更新
し皆様に配付しておりますが、名簿への住所・電
話番号の記載を希望しない方がおられましたら、
ご面倒でも代表委員あてご連絡くださいますよう
お願い致します。

・振替口座(郵便局)は左記の通りです。

00230-0-52137 名義 横浜歌人会

発行日 平成二十八年四月二十日

発行人 横浜歌人会 代表委員 吉野裕之

編集人 後藤恵市

<http://yokohama-kk.art.coocan.jp/>

このファイルはホームページ配布版のため、奥
付の内容が印刷版のものとは異なります。